

飛耳長目

通巻157号 平成28年12月1日発行

「修身教授録」探求 (第百二十一回) 芦田先生

森信三

■芦田先生について

芦田恵之助先生についてはすでに諸君の中にもお名前をうかがっている人が少なくないでしょう。先生は現在わが国の国語教授者としては、正しくその道の第一人者であります。しかし先生の偉さは一人それのみにとどまらず、さらに明治以後わが国の小学教育において、小学教師として一道を開かれた恐らくは最初の方と申してよいでしょう。先生が国語教授に置いて当代の第一人者でおられるという事は人皆これを知るところであります。しかしながら先生が明治以後小学教師として一道を開かれた最初の方であると言う一点に至っては、現在のところでは未だ必ずしも多くの人がこれを認めているとは言えないでしょう。思うにこの認識は、それが一般的になるためにはおそらくは先生の没後ある程度の年限を要することでありましょう。実際我々凡人としては、現存の偉人に対してその方の将来占められるであろう歴史的な位置を今日において十分に予見洞察するという事は甚だ困難なことであります。しかも私はそこまで行かなければ、どうしてもその方の真価を認められたものとは言い難いと思うのであります。このことは今芦田先生についても言えるのであります。先生が果たしてわが国明治以後の教育史上において、いかほどの足跡を残される方かは、私ごとき者には十分にはわかり

ませんが、しかし少なくとも先生の拓かれた道は先生の肉体の死とともに没し去るものでないことだけは確かであります。少なくともそれはかの三浦修吾先生の精神が没後二十有余年の今日においてもなお心ある一部の教育者の心の中に生きつある程度には残ることでしょう。いや先生の道とその精神とは、恐らくはこれを超えることに遙かなるものがあるでありません。今はそれらのことに関して詳細を語る暇はないのでありますが、とにかく先生の道と精神とは、明治以降始めて小学教師として一道開かれた方として、将来永く国民教育者の心から心へと伝わることでありましょう。

■ご経歴

さて先生について語るにあたって最初にまず申したいことは、先生は必ずしも生まれながらにして聡穎(そうえい)俊敏な方というわけではなかったようだということがあります。いや先生自身の述べたことでは、先生は小学時代には42、3人中の36、7番位のこととおありであったということがあります。その上なかなか根性のひねくれて手に負えないやんちゃ坊主であつたとは、先生ご自身の述懐であります。さらに先生はその学歴においても田舎の小学校を卒業せられただけであり、すなわち先生は諸君らのごとく師範教育を受けておられないのであります。

■「師」との邂逅

「師」との邂逅
しからばそのようにその素質からいっても、はたまたその学歴から申しても、何らこれという事のなかつた先生が、どうして今日のような世界を拓かれるに到ったかでありましょうか。その根本原因をなすものは果たして何でありましようか。これ先生を知る上で最も大切な点と申うのであります。今この点について直接先生から伺いますと、それは全く「師」のおかげであるということであります。すなわち先生の一生はその人生の旅路において、ゆくりなくも出逢われた一人の非凡なる精神的巨人の影響を受けたのであります。しからば先生の道の師匠とは誰でありましょうか。それは岡田式静坐法の開祖岡田虎二郎先生その人であります。実は岡田先生については、私も諸君らよりもまだ若い少年の日に、数度そのお姿を拝したことがあるのであります。今、岡田先生について申し述べ余裕を持ちません。そこで岡田先生について知りたい人は先生の語録である「岡田虎二郎先生語録」を読まれることをお勧めいたします。この書は明治以後語録の形態をなしている著述の中で最も優れたものの一つであると思えます。

■心の純粹さと生命の弾力

さてここで一つの注意を要する事柄は、先生が初めて岡田先生に出逢われた年齢のことです。と、先生が初めて岡田先生に出逢われたのは、実に先生

40の歳であつたということであり、これは深く注意すべきことと思ふのです。と申すのは、人間四十にもなれば、ほとんど大部分の人はその心が凝固してしまつて、いかなる偉人であつても容易にその偉人たることに気がつかず、仮に多少は気づいたとしても、自ら就いてこれに学ぶという事は容易に為しえないのが普通であります。しかるに芦田先生のお偉さは、年齢40に及んでも真に優れた方に出会われれば、自己の一切を投げ出してこれに就き従うだけの心の純粹さを失われなかつた点にあるのであります。かかるに心なき人は先生のこの心の純粹さを以て、先生のお弱さのごとくに誤り解する者が時にないでもありますまい。しかしかくのごとき誤まれるもまた甚だしきものであります。これこそ実は先生の生命力の強靱無比なる弾力性を示すものであります。けだし人間が一人の精神的偉人に出逢つて自己の今日まで持ち来たつた一切を投じて、帰依し尊敬するということ、実に容易ならざる精神的弾力性を要することであり、すなわちそれには自己の今日までの我見の一切を投げ出すだけの生命の弾力なくしては、到底なし能わざることだからであります。が同時にまたかくして一切を投げ出し得る人は、その後の空所へその卓越せる人の持つ一切を吸収するだけの大いなる生命の吸収力を持つわけであり、そして芦田先生という方は、年齢40にしてまさに斯くのごとき人生の大転換を敢行せられた方であり、今先生のその時のお

年より若きことまさに二十年である諸君は、この一事を知つて果たしていかなる感慨がありますか。

■教壇行脚

かくして岡田先生のお導きによつて、新たな人生の道に立たれた先生は、その後年齢53に至つて、種々なるご事情からして、現在のような教壇行脚を思い立たれたのであります。すなわち同志の招きに応じて、全国至る所の小学校の教壇に立ち、見知らぬ子供達に国語の授業を試みられるのであります。かくして先生のご授業は年と共に錬磨せられて、まさに入神の技とも申しあげべき境域に達し、先生が来られるといへば、直ちに200、300の人がその教場に馳せ参ずるのであります。現に大阪府下へもこの間からおいでになつて、来週の月曜日頃まで教壇所で授業をされることになっております。

■「皆読皆書」

さて先生のご授業は、ただいまも申すように、実に神品の名に値するものであります。しかも私も私どもはただ外面に現れたその巧みさのみに見とれて、その依つてつて来たる真源を見逃してはならないのであります。思うに先生の教授法が今日のごとき神品の域に達せられたのは、ひとえに先生の児童に対する深いご慈愛によるほかないと思ふのであります。先生はそのご主張において「皆読皆書」という事を申しておられますが、この「皆」の一字にこそ先生の教授法の根源がある

と思われず。すなわち「皆」とは一人も洩らさじとされる先生の限りなき慈愛の現れであります。諸君は未だ実地の経験を持たないからよくは分らないでしょうが、現在わが国の小学校には国語読本の読めない生徒が全国を通して約35%はあるのであります。そして芦田先生の慈愛は、日本国中かくのごとき哀れな児童を一人たりとも存在せしめないという点にあるのでありまして、ここに芦田先生の大願は存するのであります。これとより先生の一代にして成就することは到底できないことでありましよう。同時にここに先生の道は後に來たる同志によつて、継承嗣述せられる必然性があるわけでありましよう。そもそも人間の努力といふものは、自分一代だけではどんなに努力してみたとところで大抵限りのあるものであります。そこで偉大な仕事ほど、これを後に來る人々に托すほかないということになるのです。同時にかくのごとき大業に目が開かれてこそ、そこに初めて人間としての眞の生きがいがあるといふものです。このことはその創始者は基よりでありましようが、たとえこれを継承する者といえども、また同時に人生の生き甲斐を感じることでありましよう。けだしそれはそれが大道なるの故を以てであります。そして芦田先生は小学教師としてあさにかくのごとき大業の第一歩を踏み出された方と申してよいでしょう。

■「ここに残った「お言葉」
さて一昨日先生から突然のお使いで、

わざわざ私のところをお尋ねくださるというお言葉でありましたが、御老齡の先生においでを頂くという事は本末転倒で、恐縮のいたりでありますので、私の方から伺つて一タゆつくりとお話をうけたまわつたことであります。その際先生の申されたお言葉のうちに「教育者も生徒の優中劣の別を立てたい間は、未だダメである」とのお言葉がありました。これは一見平凡な言葉のごとくでありつつ、実に至言と言ふべきお言葉であります。と言ふのは、つまり生徒の「優中劣」が気になる間は、教師自身がまだ相對の域を脱していない何よりの証拠だからであります。つまり教師自身が「優中劣」の區別をもつて生徒に臨んでいたんでは、仮に優中の生徒は伸びるとしても、劣等生は永遠に救われる時は來ないでしょう。ちようど樹木は年年に伸びても、樹下の苔はいつまでも変わらぬようなものだとおっしゃいました。この一語にも先生の教授法の根底が奈辺に存するかは明らかであります。

■「号」について
なお先生の「号」はお名前の一字をとつて「恵雨(けいう)」と申されますが、これまさしく先生の御精神の結晶と申してよいでしょう。「恵雨」はまた慈雨に通じましようが、誠に慈雨は大木なりとて多くを潤さず、野草雑草なりとてことさらに避けるということをしないのであります。かく万物にあまねく降り注ぐが故に慈雨は万物を育て上げるように、慈雨

を号とされる先生の教育的慈愛は日本全国の小学児童の上にあまねく降り注いでいるのであります。

■ご案内

この日曜日には中河内の沖辺(現在は意岐部?)小学校で先生のご指導がありますから、皆行つて拝見するがよいでしょう。先生ももうお年がお歳ですから、今回の機会を逸せずぜひ参上するがよいでしょう。沖辺小学校は大軌(今の近鉄大阪線)の布施で降りて、それからバスで行くがよろしい。まさかのときには先生の身分とは言え、タクシーを飛ばしても駆けつけるというぐらゐの生命の弾力があつて欲しいものです。先生の教壇場に立たれたお姿が残像として諸君の網膜に一生残るとしたら、それだけでも実に絶大な収穫です。

森信三先生と芦田先生の邂逅が先生ご自身から生徒諸君に詳しく語られている。芦田先生は森信三先生より20歳ぐらゐ年長であられた。しかし芦田先生は以後、森信三先生を、「師」と同等な存在と認識されておつきあいされたのである。(二繁)

(修身教授録第三巻昭和18年9月刊 同志行社刊)

戦争と平和(微言)

○人類が今日ほどその言うことと行うこととの間に矛盾を示した時代はない。口に人類の平和を唱えつつ手に武器を造る矛盾の今日ほど大なる時代はないであろう。
○この空前の大矛盾に対して今日ほど人

類が看過している時代もまた空前といつてよい。人類は今や自らの犯しつつある最大矛盾の意義さえも把握し得ない状態にある。

○人類が今や空前の大矛盾を犯しつつあることは今や人類が自らの負える最大業の一つを果たさしめられんとする前夜におかれて示すものである。

○近く全人類が身を以て果たさしめられんとしつつある業とは何であるか。他なし。戦いの業であり即ち大規模における人類の相互殺戮の業である。

○今や人類はこの人類の相互殺戮を以て悪とするだけの認識には達しかけていないが、しかもその手はなお次の一戦のための武器を造りつつある。その手に武器を造りつつ主唱せられる平和論が如何なるものであるかは説明を要しまい。強いて求めんとするものあらば「聖書」を見よ。

就中「山上の垂訓」を読み。
○恐らくは避け難いであろう次の戦争における最大の興味は「どちらが勝つか」という問題でなくて、戦後の「戦犯問題」であろう。

○もし次の一戦の終結後なお「戦犯」の裁きが行われるとしたら、人類は次の一戦を以てしてもなおまた人類の最終戦たらしめえないかも知れぬ。

○次の一戦がもし避け難いとしたならば、その場合「戦犯法廷」は、恐らくは人名の法廷でなくして、全地表となるであろう。

○人類の今日銘記すべきことは、神の嘉みし給う講和は、相互に武装を放棄せる

両民族間のみ結ばれるものであろう。武備を放棄せざる講和は、神の眼からは擬似講和であつて真の講和ではないであろう。

○もし次の一戦が避けられぬとしたならば、それは人類前史における最終審判ともいふべきものとなるであろう。

○「天国は近づけり」という基督の予言が、今日ほど切実な実感を以て聞かれることはない。人類は今や改めて天国への希求に立っている。

○理性では良くないことと分つていながら、実際には止められぬ場合、仏教ではこれを業と呼ぶ。人類は今や戦いという人類最大の業に直面している。

○業は理性によつて断ち切ることが出来ないで身を以て果すこと……即ちその災害の只中に身を晒すことにより、初めてその根を断ち切ることの出来るものである。

○次の一戦がたやすく避け得られるかに考えるのは、恐らくは人間性に対する認識の……ひいては広く現実そのものに対する認識の浅さを語るものといつてよいであろう。

○単に形式的なる平和論が貴いのではなくて、人類平和の実現が如何に容易でないかの深い認識こそ貴いのである。すべて高貴なるものはこれを得ることもまた困難であるとは、哲人スピノザが、その「倫理学」を結んだ最後の言葉である。

○だが人類平和の実現はさまで遠いことではなさそうである。たゞ次の一戦を越えることなくしては恐らくは「戦いなき」

無限の地平は拓かれぬであろうということも、ほど予言し得られそうである。

○戦いなき世界へは最早さまで遠くない。しかしわれわれはこれをわれら人類の努力によるものと自惚れてはならない。何となれば、もし原爆が神から授けられなかつたならば、恐らく戦争は永遠に息まなかつたであろうから……。

○われわれ人間は平和もまた神より賜はることを知らねばならぬ。否平和こそ神の賜う最大の賜物たることを知らねばならぬ。「開頭」昭和25年5月号 通巻38号

あとがきに替えて

「戦争と平和」の題は厚顔にも編集者がつけた。この微言が70余年前の文章であると誰もが信じ難いであろう。この認識は現代でも通用すると思うからである。しかし残念ながら、人類が武器を放棄する時代は未来永劫来ないだろう。米国民が銃を捨てきれないことと同義であろう。武器を製造し販売しながら、平和を語る人類は消えることはないであろう。嗚呼。(29日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-4513422
Email:hj3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syshn